

# 中国語と近代

— 東アジアの言語環境における思考 —

沈 国 威  
SHEN Guowei

We should focus on the following three aspects when researching the relationship of Chinese language and modern era in the East Asia language environment: modernization of Chinese language; modernization of Chinese linguistic research; and the relationship between modernization of the Chinese language and modernization of East Asia. This paper discusses these issues from the perspectives of the range of research objects, methodologies, and the unique features of the language materials. The paper also takes into consideration the tremendous impact that Japanese resources and theories have had on the modernization of the Chinese and on research on the Chinese language. These influences are far different from those included in the “*phenomenon of Europeanized grammar*”. At the same time, Chinese characters and the Chinese language have been the only media through which Asia has received Western civilization, and thus had played an important role in the process of modernization in East Asia.

## Key word

modernization of language; Chinese; phenomenon of Europeanized grammar; peripheral approach;

## 一、緒言

まず本論文の標題を確認しておこう。「中国語（汉语）」とは何か？「中文、漢語、普通話、国語、官話、雅言、白話、土白……」これらの呼称は、いずれも太平洋の西岸から崑崙山脈の麓まで、黄河流域から揚子江流域までの広大な土地の上に古から生活を営んできた民衆が使用した言語のある側面を捉えるものである。これに外国人からの視点を加えれば、Mandarin（マンドリン）、唐話、清語、支那語などの呼び名も追加されることになる。

一方、「近代」とは何か？「近代」という言葉は modern の日本語訳で、西洋史学の時代区分

を表すタームである。しかし民族、文化、言語が異なれば、歴史の大河を切り刻む方法と尺度も異なるので、英語の modern は、日本語の「近・現代」、中国語の「近・現代」とは指し示す時期が重なる部分があればはみ出す部分もある。また同じ中国であっても歴史学と中国語学は異なる時代区分をしている<sup>1)</sup>。ただ、「近代」とは何かとその本質を突き詰めて質せば、「市民社会、国民国家、産業革命、啓蒙主義、進歩史観、知識、理性……」などがいずれも「近代」を論じる際のキーワードとなろう。また「科学」は、近代が近代である所以の金科玉条のごとき基準であることは疑問の余地もない。

それでは「中国語」と「近代」の間にどのような関連性があるのだろうか。我々は言語をある時代に関連づけたとき、その言語の時代的特徴に関心を寄せるのが常である。中国語を近代、特に東アジアの言語環境において考察しようとする筆者のここ十数年の問題意識は、以下の三点に集約することができる。

1. 中国語の近代化に関する研究
2. 中国語研究の近代化に関する研究
3. 中国語の近代化と東アジア近代化の相関関係に関する研究

上記の研究目標を達成するには、研究方法と言語資料の両面において、新しい思考を必要とするのである。

## 二、中国語と外国語

中国語には古代より「雅言」と「方言」の別がある。これは共通語と方言という中国語の異なるバリエーションに対する素朴な認識と言えるが、問題の波及は中国語の内部に止まっている。貿易や朝貢冊封制度の確立により、「夷狄」のことばを伝える通事や舌人が現れ、彼らは言語接触を体験する先駆者であった。漢唐以来の大規模な仏典翻譯事業、そして16世紀末イエズス会士の来朝、特に19世紀初頭新教宣教師が来華してから、人々は「方言」というこれまでの概念では捉えきれない、独自の書記体系を持つ「外国語」の存在を強く意識し始めたのである。中国における英語教育はアヘン戦争後、香港、広州で宣教師によって始められ、また19世紀60年代に入り、清政府によって北京同文館、上海広方言館といった外国語学習機関が設置された。19世紀末になると梁啓超は中国沿海都市での英語学習について次のように指摘している。「西文西語之当習。今之談洋務者莫不言之矣。雖然有欲学焉，而為通事為買辦以謀衣食者；有欲学焉，而通古今中外，窮理極物，強國保教者。受学之始，不可不自審也。今沿江沿海各省，其標名中西学館、英文書塾以教授者，多至不可勝数。（西洋言語を学ぶべきである。今日洋務を語る者は口を揃えて言う。しかし通訳やブロッカーになり生計を立てるために習う者もあれば、

古今東西に通じ、知識を求め、国を強くしたい者もある。勉学を始める前に自ら考えなければならぬ。今、揚子江流域、沿海地方では中西学館と称し、英語を教える学校が数え切れないほど多い」<sup>2)</sup>。英語学習施設の急激な増加や目的の多様化が窺える。一方、それまで殆ど中国人の視野に入っていなかった日本語は日清戦争敗戦後初めて外国語学習の対象となった。「為通事為買辦以謀衣食」という英語等の学習動機と異なり、日本語学習は西洋の新知識を吸収する捷径と考えられ、20世紀初頭からブームが沸き起こった。外国語との遭遇により中国語は相対化され、また教科書、辞書の編纂により、他の言語との間に語句のレベルにおいて対応関係が築かれようとした。その過程で訳語、新語の著しい増加があった。また表現様式、文型上も大きな変容をもたらされた。幅広い接触と深い相互作用が中国語を含む東アジアの言語の近代的特徴である。近代の言語接触は、国境地帯の雑居や移民、貿易等によって引き起こされる直接接触に比べ、新知識の受容、そして伝播の媒体としての言語の間接接触はもっと大きなウェートを占めている。前者は口頭語を主とすることが多く、生活、物質名称の借用やビジン言語などの現象を引き起こすが<sup>3)</sup>、後者は主として文章語を通して現れ、抽象的語彙の発生や文章形式の変革を促進する。

### 三、「中国語」の近代化に関する研究

言語は絶えず変化している。これはいかなる時代にも共通する。中国語研究において「近代中国語」は9～19世紀までの長い期間を有するという主張もある<sup>4)</sup>。中国語の変化は非常にスローペースで行われ、「超安定した状態」と言われる所以である。しかし19世紀以降、中国語は変化のテンポを速めた。南京官話から北京官話への転換、文語文から口語文への交替、新語や訳語の発生、新しい語構造パターンや表現様式の出現、連体修飾形式の普遍的な使用、「普通話」という共通語の制定、漢字の簡略化（簡体字）と中国語は目まぐるしく変容し、わずか数十年の間に、千年よりも大きな変化を成し遂げた<sup>5)</sup>。言語の変化について、我々は2つの質問に答えなければならない。1つは言語がなぜ変化するのか、いま1つは言語の変化に方向性があるのかということである。少なくとも近代以降、言語の変化は一種の「進化」、即ちある特定の方向に向かって少しずつ完全化されていくと見なされていた傾向がある。これは西洋の進歩史観が我々の言語意識に及ぼした影響と言うことができる。例えば我々はかつて、漢字のような象形文字は非文明的な文字であり、表音文字へと進化するのは必然的で、最終的にはそれによって取って代わられると信じていた。ローマ字化や漢字の簡略化はいずれもこのような変化観に理論的根拠を求めようとした。しかし時代の要請や社会の変動、特に政治的干渉といった言語外の要因が強烈に作用し、一時的或いは永久的に言語を変えてしまうこともあるが、言語は基本的に自律的に変化するものであると認めなければならない<sup>6)</sup>。言うまでもなくこれは次のような事実を否定するものではない。東アジア言語の近代的変化は少なくともその変化のテ

ンポにおいてそれぞれの言語の自律的な発展の結果というより、いわゆる「西学東漸」という西洋からの新知識の流入に刺激され、加速させられた側面が大きい<sup>7)</sup>。従って言語の変化過程を記述する際、東西、及び東アジア地域内における言語接触と相互の影響作用は何よりも重要な視点となる<sup>8)</sup>。

中国語の「近代化」において、最大の誘因は何だろうか、また、最も大きな変化は何か。これまでに中国語の近代的变化について、「西洋文明的接触同时直接在我们的语文上发生了影响，最重要的是词汇的改造，新的词语跟着新的物件和新的思想像潮水一样的涌进来；其次是文法方面，也增加了好些新的语句组织的方式。(西洋文明との接触は同時に直接われわれの言語に影響を及ぼされた。最も重要なのは語彙の改造である。新語は新しい事物、思想が怒濤のように入ってきた。次は文法の面である。新しい文型も多く増えた)」という呂叔湘の指摘からも分かるように<sup>9)</sup>、その誘因は西洋言語との接触に帰し、「現代中国語の欧化語法現象」という名の下で考察が行われてきた。意識的ではないにせよ、日本語からの影響を軽んじられた。事実としては、中国語は語彙面において日本語の影響を最も大きく受けたが、このような語彙の増加はこれまで言語の本質と無関係なものと考えられてきた節がある。王立達は「関于、对于」などの複合前置詞を日本語からの借用と主張し(「現代漢語中従日語借来的詞彙」『中国語文』1958年)、強い反発を受けた。確かに日本語には「関于、对于」という語形が存在しない。王論文の趣旨は日本語の「関して、対して」の影響によって、中国語に「関于、对于」という複合前置詞が発生、或いは頻用されている現象を指摘しているものであろう。現在「関于、对于」は目的語を前置させる前置詞として王論文が発表された50年前よりも盛んに使用されるようになった。筆者は、中国語の最も大きな近代的变化は次の3点になると考えている。

- 体言・用言間の品詞転換手段の獲得 (復音節化)
- 連体修飾機能の増強 (連体修飾部の長大化により、複合前置詞の活発化)
- 叙述アングルの多様化 (被動文の発達)

これらは社会の変化に適応しようとする言語内部からの要請と考えられる。要するに「欧化語法現象」について日本語の関与も含めてその内実を解明する努力が必要である。

一方、言語の変化は、語彙、音声、文法の三つの側面に現れるとされるが、このような言語自身の変化はもとより、言語使用者側の言語意識の変化にも留意すべきである。近代以降、それまでになかった社会的意義が言語に付与された。つまり言語は国家、民族、個人という三つの次元においてアイデンティティを確立させる重要な装置となり、近代国民国家の成立は、自然言語レベルの「方言」を「国語」へと変化させ、言語使用者は「国語」というイデオロギーを獲得したのである。

では「方言」から「国語」へはどのようなプロセスを辿ってきたのだろうか。欧州を例にとれば、俗語が文字と文法を備え始め、これによって文学作品を記録する可能性が生じ、国民文学の形成に伴って最終的に「国語」の地位を獲得する——この過程およびそれに伴う諸現象を

「言語の近代化」と呼ぶ<sup>10)</sup>。また劉進才氏は、アンダーソン（B. Anderson）の近代民族主義の台頭と国語形成との関係に関する論述について「ヨーロッパ各民族の言語発展の現代的系譜において、各民族の言語の誕生とは、古くからの聖なる言語——ラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語から脱却し、地域の方言に接近することにより、近代的出版言語を通して各方言地域の書面語を確立するプロセスである。」と解釈し、「清末以降の中国にとっては、民族主義の台頭と出版言語の誕生は、欧州の状況とは異なっていた」とも指摘している<sup>11)</sup>。

中国とヨーロッパ各国の状況の違い、特に出版言語の方面では同一視できないというのは正しい意見である<sup>12)</sup>。ただし、一つだけはヨーロッパと全く同じである。東アジア各国も、直面しているのは単なる独自の言語問題だけではなく、地域的な俗語や方言を如何にしてそれぞれの「国語」に進化させるかという共通の近代的課題があるという点である。この意味において、近代以降の東アジアにおける各言語の変化は、その重要性において歴史上如何なる時期よりも上回っていると言える。

これら、中国語そのものの近代化の過程における種々の課題は、いずれも深く研究する必要がある。

#### 四、中国語研究の近代化に関する研究

いかなる民族も自身の言語について省察したり、実用的な思索を行ったりする。中国でも19世紀末以前に中国語を内省的に記述する文献は夥しい数に上り、文字学、訓詁学、音韻学、及び詩文創作のための修辞学などの研究成果は、非常に豊富である。清代の「小学」が残した学術成果も大きい。しかし、中国に「言語学」は生まれなかった。即ち、「科学」的な言語研究は存在しなかったのである。これは言語に関する探求はあくまでも「経学」の附庸であり、「文以載道」という言語運用観に帰因すると考えられる。

いわゆる「科学」的な言語研究は西洋から伝わったという主張に反論する者はいないだろう。宣教師、或いは宣教師が提供した言語資料を利用したヨーロッパの学者たちはラテン語などの西洋言語の枠組みの中で、中国語を分析したり記述したりした。布教の為に中国語を身につけようとすることや、西洋の読者に中国語とはどのような言語であるかを伝えようとするのがその動機であった。宣教師が中国語で執筆した言語学関係の書物は『西儒耳目資』（1626）が嚆矢となるが、「西儒」と銘打っているものの、中国の読者を念頭に置いたことは疑いの余地がなかろう。『西儒耳目資』は西洋の音韻学の知識を取り入れた著書である。一方、中国語による文法書の出現はさらに二百年近く待たなければならなかった。モリソンによる『英国文語凡例傳』（1823）はマラッカにある英華書院の生徒のために用意した英文法の小冊子で、名詞、動詞等の品詞概念は訳されずに英語のままになっている。著者は中国語のタームを用意することができなかったのである。その後のロブシャイトの『英語文法小引』（1864）には中国語訳の

タームが使用されているが、*New Idea and New Terms* (1913) の著者 A. H. Matter (著名な宣教師狄考文の未亡人) も認めているように宣教師が作成した文法関係のタームは 1913 年時点では一般に認められなかった<sup>13)</sup>。西洋人によって西洋言語で著された著作や辞書などは、西洋言語学の枠組みの中で中国語の音韻、文法、語彙について記述することでは一応の成功を収めたと言ってよいであろう。しかしその中国語で書かれた著作は、中国の読者に言語に関する研究において新たな道筋を示すには十分ではなかった。馬建忠の『馬氏文通』(1898) や嚴復の『英文漢詁』(1904) はいずれも直接西洋文献から知識を受容したものである。西洋言語学に関する知識の多くが日本語を学習する過程で導入されたことはこれまでに指摘されていなかった事実である。言語学のタームは、その大多数を日本語から借用したということがこの点を如実に物語っている。言語の「科学」的研究は、明治期の日本の学者も目指した目標であることを付け加えておきたい。中国語を含む言語研究の近代化の過程において、外国、特に日本の影響等について解明しなければならない点が多々ある。

## 五、中国語の近代化と東アジアの近代化

ある国の言語変化の問題を、伝統的言語から近代民族国家の言語への進化にまで広げて考えた場合、われわれは次のような事実と直面する。表意文字 (または音節文字、形態素文字とも呼ばれる) である漢字には、ヨーロッパやアジアのその他の古典言語 (ラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語、アラビア語など) に備わっている宗教的神聖性がない。しかしそれは、漢字が言語を超えた表記システムとなることを妨げなかった。漢字は東アジア各国に、<sup>テキスト</sup> 古典と言語の記録手段を提供し、漢字文化圏と呼ばれる文化共同体を形成させた。漢字文化圏にとって、漢字の存在は書面語による表現を可能にしたが、同時に、漢籍の規範性によって言語使用者の表現の自由が著しく束縛される結果をもたらした。このため、漢字文化圏内の各言語は「国語」として成立する場合、脱漢文の過程を経なければならない。しかし漢字は、様々な議論が交わされ、多くの改革が実施されたにもかかわらず、その地位が揺らぐことはなかった<sup>14)</sup>。そればかりか、漢字文化圏では、正に漢字によってこそ西洋近代の新知識の受容を実現したのである。現在すでに漢字を使用していない国の「国語」においても、「漢字語」ならず「漢音語」が書き言葉の主要部分を占めているのである<sup>15)</sup>。

近代以前、漢文は漢字文化圏において文章語の共通語 (lingua franca) としての役割を果たしてきた<sup>16)</sup>。それに比べれば、日本語は商業活動や古典の伝承、新知識の受容などあらゆる分野において重要な言語とは言えなかった。しかし、明治維新以後、日本語は他に先駆けて近代的国語へと変身を遂げ、新知識を伝える媒体という地位を獲得した。漢字文化圏の他の国と地域は、日本語によって短期間で西洋の新しい知識を受け入れることが可能であることに気づき、日本語は歴史上初めて、非母語話者の学習対象となり、漢文に取って代わって、一地域の「方

言」から東アジアの優勢言語へと成り上がったのである。日本語の変化は、江戸時代以来、西洋の新知識を受け入れてきた結果であるが、その過程で漢字による新語・訳語が決定的な役割を果たした。

言語は知識の受容と伝達の媒体であり、社会生活と密接に相互作用を及ぼす関係にある。西洋の新知識の導入は、中国語の近代化への変化を促進し、同時に中国社会の種々の近代的変化が中国語によって記録された。また、漢字文化圏の存在により、中国語の近代化は中国語内だけにとどまらず、東アジア全域に拡大した。中国語と中国の近代が分かち難い関係にあるのと同様、漢字漢文は東アジアの近代化と密接な関係にある。西学東漸という大きな流れの中で、中国語は漢字文化圏の他の言語に大きな影響を及ぼす一方、漢字文化圏の他の言語からも影響を受けた。特に日本語の影響は非常に大きかったが、中でも最も重要なことは、漢字を利用して西洋の新概念を受け入れるという問題における「共創、共享」である。漢字文化圏内では、多くの抽象語や時代のキーワードが同形（または同音）語という形式で存在しているが、これは地域内の言語接触、語彙交流の結果であることは疑問の余地がない。一方、各言語における同形語（同音語）の意味、用法上の相異は、それぞれの国や地域が西洋の新知識や新概念を受容した過程を反映したものである。近代新知識の受容と表出には新しい語彙と表現様式が必要である。厳復の翻訳が最終的に中国社会に受け入れられなかったことは言語の面において社会の要望を満たせなかったからであるといえるだろう。新しい語彙と表現様式、特に専門分野におけるキーワードや基本用語の形成は、近代の学問体系が成り立つための基盤である。キーワードや基本用語の歴史は、往々にしてその学科の形成史であり、言語の近代化に関する研究は、「近代」と冠するその他の研究分野の基礎である。

## 六、方法と資料

我々の研究は、新しい方法論を提唱しなければならないと同時に言語資料についてもこれまでと異なる視点から捉え直す必要がある。中国語および中国語史の研究において、中国本国の文献などが主要素材であることは疑うべくもない。ただし、「近代」に関わる場合、外国の文献資料を軽視するわけにはいかない。それには、以下のようなものがある。

- 西洋関連のもの：中外辞典、西洋人の言語研究著作、専門用語集、中国語或いは外国語の教科書、西洋書物の中国語訳、新聞雑誌……
- 日本関連のもの：唐話資料、明治期の翻訳書、外国語辞典、専門用語集、中国語教科書……
- 朝鮮半島関連のもの：中国語教科書……

これらの材料はまた、独自に作成、共同で作成、中国で作成、中国以外で作成などに応じて分類することもできる。目下、文献の整備と目録の作成が早急に必要とされている。

外国の文献資料の積極的な導入は、「周縁アプローチ」という新しい方法論の提起を意味して

いる<sup>17)</sup>。他山の石や岡目八目などのことわざもこの方法論を直感的に表したものである。周縁から中心の本質がよく見える。外国の文献資料には、例えば西洋人の中国語の量詞に関する観察、記述からも分かるように異なる視点によって捉えた中国語の真実が含まれている<sup>18)</sup>。いかにして周縁資料を我々の研究資源にするか？外国の文献資料の利用について、現時点では、その系統性や掘り下げの深さ、広さの上でまだ改善の余地がある。このように「第三の目」からの観察は、近代以降の中国語に関する研究の大きな特徴となるべきだと考えている。19世紀末から20世紀初頭の数十年間は、中国語が最も激しい変化を被った時期である。中国語の激変ぶりを目にし、それを記録した来華西洋人の書物は中国語の近代的变化を捉えている貴重な資料である。

## 七、終わりに：中国語の進化の道程

近代以降、中国語は大きな変化を遂げてきた。特に19世紀末から20世紀初頭に、中国語は質的变化の時期を迎えた。中国語の「進化」はその後もとどまることなく今日まで続いている。では、現在我々が使用している「中国語」は「近代」的な言語だと言えるだろうか？答えは、否定的なものであるかもしれない。国民国家の「近代」言語とは、少なくとも以下の特徴を備えていなければならない。

- 絶えず現れ、日々増加する新概念に対処することができること（生産性）
- 新しい知識を伝えたり、教えたりすることができること（伝播性）
- 書面語と口頭語がほぼ一致していること（普及性）
- 大多数の国民に理解され、均等に習得される可能性を備えていること（民主性）

これらの観点から見れば、中国語の「近代化」は未完成であると言わざるを得ない。（『語文建設』、『語文近代化』といった名称の雑誌の存在も、その目標に向かって懸命に努力中であることを物語っている）。中国語にはまだ多くの過去の遺物が残っており、我々の文章価値の指向性を左右している。例えば、非母語学習者が書いた中国語の文章が、中国社会に受け入れられ、評価されることは非常に困難である。これらの困難は個人の才知を超越しており、学習者の努力とも比例しない。言語そのものの問題とすべきであろう。長期間の訓練、しかも言語学習の臨界期以前の訓練が成功の鍵を握っている。このような言語は、全人類、全世界のものということはできない。

中国語は変化し、その変化は今でも続いている。中国語の変化の過程を歴史的、現実的に把握しこれを記述することは、言語研究者の任務の一つである。

注

- 1) 中国の歴史学界では1840年のアヘン戦争から1919年の五四新文化運動までが近代とされ、それ以降は現代とされているのに対して、中国語学の研究では宋、明の時代まで「近代」に含めるのが一般的である。
- 2) 梁啓超『中西学門径書七種・幼学通議』（1898）。
- 3) 内田慶市・沈国威編著『言語接触とピジン—19世紀の東アジア』（東京：白帝社、2009）を参照。
- 4) 王力は「13世紀から19世紀（アヘン戦争）までは中国語の近代」としている（『漢語史稿』35頁）。一方、呂叔湘は、晩唐五代、即ち9世紀を近代中国語の始まりとしている（劉堅著『近代漢語読本』に寄せた呂叔湘の序文）。
- 5) 王力は「从词汇的角度来看，最近五十年来汉语发展的速度超过以前的几千年。（語彙の角度から見れば、ここ50年来の中国語の変化のスピードはこれまでの何千年よりも速い。）」（『漢語史稿』、1958年初版、中華書局1980年版、516頁）；「从民国初年到现在，短短的二十余年之间，文法的变迁，比之从汉至清，有过之无不及。（民国初期から現在までの僅か20数年の間、文法上の変化は漢代から清代までよりも大きい。）」（王力、『中国語法理論』1944年、『王力文集1』、山東教育出版社、1984年、434頁）と指摘している。
- 6) 近年このような反省は文学研究にも見られる。例えば袁進は「我们过去一直有一个误区，我们相信“五四”一代的新文学家所说，白话文取代文言文是一大进步。这也意味着我们确信，语言是在不断进化的。我本人过去也是持这样的观点。其实，这种看法未必正确。根据语言学研究，语言很难说是进化的，语言是在不断发生变化，但是这种变化结果很难说是进步还是退步。（我々はかつて誤解していた。それは、「白話文が文語文に取って代わることは大きな進歩だ」という五四時代の新文学者たちの主張をそのまま信じてしまったからである。これはまた言語が絶えず進化しているものだ」と確信していることでもある。わたし自身もこれまでそのような考え方を持っていた。しかし、このような考え方は必ずしも正しくない。言語学の研究によれば、言語が進化するものだととはとても言えない。言語は確かに絶えず変化するが、但しその変化の結果は、進歩か退歩かは断定できない。）」（『中国文学的近代変革』、広西師範大学出版社、60頁）と指摘している。
- 7) 王力は中国語の欧化語法現象の発生は、往々にして中国語内部において動機付けがある。外部の刺激はその可能性を現実にしたという旨を述べている（王力『中国語法理論』1944年、『王力文集1』、山東教育出版社、1984年、435頁）。また、袁進は前掲書で外国研究者の発言を引用して次のように指摘している。「语言一旦出现巨大的变化，往往与外部的变动有关。“如果民族的状况猝然发生某种外部骚动，加速了语言的发展，那只是因为语言恢复了它的自由状态，继续它的合乎规律的进程”。（言語に大きな変化が現れた場合、往々にして外部の変化と関係がある。「もし民族の状況において、突然外部的变化が発生し、その言語の変化を加速させたならば、それは言語がもともとの自由な状態に戻り、その自律的变化のプロセスを続けるだけである。）」（60頁）。
- 8) これまでに次のような著述が公刊されている：『漢語史稿』（王力、中華書局、1958年）、『五四以来漢語書面語言の変遷和發展』（北京師範学院中文系漢語教研室編著、商務印書館、1959年）、『現代漢語欧化語法概論』（謝耀基著、香港：光明図書公司、1990年）『華語百年』（市川勘・小松嵐著、上海教育出版社2008年）、『現代漢語欧化語法現象研究』（賀陽著、商務印書館、2008年）。
- 9) 呂叔湘『中国文法要略』初版1942年、商務印書館、1982年版、5頁。
- 10) 山本真弓『言語的近代を超えて』、東京、明石書店、2004年、10頁。
- 11) 劉進才『語言運動與中国現代文学』、中華書局2007、13～14頁。アンダーソン著、呉容人訳『想像的共同体』、上海人民出版社2005年版、38～47頁。

- 12) いわゆる「出版言語」とは、印刷技術がもたらした書物の流通と書記言語の獲得という二つの相関する問題である。
- 13) 沈国威「西洋人記録的世紀之交的新漢語」、『東西学術研究所紀要』、第42輯、2009年、101～111頁
- 14) 漢字と漢字によって記録された典籍との間に切り離すことのできない共存関係は存在しないと言える。
- 15) 例えばベトナム、北朝鮮は漢字を使用していないが、日本語の字音語に当たる語彙が数多く存在している。
- 16) 漢文が完全に「共通語」の地位を失ったのは、20世紀に入ってからである。
- 17) 内田慶市「中国言語学における周縁からのアプローチ——文化交渉学の一領域として」、『東アジア文化交渉研究』、創刊号、2008年、29～43頁。
- 18) マシーニ「早期の宣教師による言語政策：17世紀までの外国人の漢語学習における概況——音声、語彙、文法」、内田慶市・沈国威編著『言語接触とピジン——19世紀の東アジア』、17～30頁。

### 要旨

在东亚的语言环境下讨论汉语和近代的关系时，研究的重点应为：1、关于汉语近代化的研究；2、关于汉语研究近代化的研究；3、关于汉语近代化与东亚近代化相关关系的研究。本文从研究对象的范围、方法、语言材料的特点等角度对上述问题进行了讨论。本文认为日本资源无论是对汉语的近代化还是汉语研究的近代化都发生了极大的影响。这些影响远非“欧化语法现象”所能涵盖的。同时，汉字汉文是东亚接受西方文明的唯一媒介，在东亚近代化进程之中扮演了重要的角色。

### キーワード

言語の近代化、中国語、欧化語法現象、周縁アプローチ